

先月(十一月)、第2回バレーボールワールドカップ77大会が日本において初めて開催され、その東京会場として、国立代々木競技場第一体育館が選ばれた。

会場が同体育館に決まるまでの経緯は、日本バレーボール協会が昨年十二月に本競技場宛に提出してきた文書に始まる。その文書において、本競技場第一体育館のアイスクレーターリンク上に仮設の床を組立てて、そこで第2回バレーボールワールドカップ77大会を挙行したい、と申し入れてきた。これに対し、部内で慎重協議、検討した結果、技術的に困難ではなからうとの判断を下し、同協会の申し入れを承諾することとした。その後、大会の日程、氷上面保護対策、仮設スタンドの設置問題等二十七項目について、同協会と打合せ、検討を重ねてきた。

検討を重ねつつも、とにかく氷上面にバレーボールコートを設置するのは、われわれにとつて初体験なので、競技中に不測の事故でも起りほしくないかという懸念が頭から離れなかった。

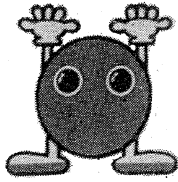
施工にあたって最も問題となるのが、氷上面への「床」設置である

る。氷上面にバレーボールコートを設置するということは、世界にも例がないことなのでその施工方法、作業方法については、自分たちで研究し、調査していくしかなかった。

会場の温度の上昇による氷解をいかにして最小限度にとどめるかということ、氷上面にポリプロ

すぐりの技術者を多数動員することとなった。特に床面のバランスと木材の選定については、時間をかけて研究し、協議を繰り返したものである。床面の設置に費した時間はおよそ二十二時間に及んだ。(解体撤去には十七時間を費した。)こうして、バレーボールコートは完成し、開会式の日を迎えることになった。

加した芸能界のスターが、参加国を歌やコーラスで紹介し、いよいよ式典のムードは盛上がりを見せた。さらに、菊の会の人たちによる民踊や、またアトラクションもあり、全く型破りの開会式となった。それだけに、中学生、高校生を中心とした観客を大いに沸かせた。



## バレーボールワールドカップ

を終えて

野見山 浩一

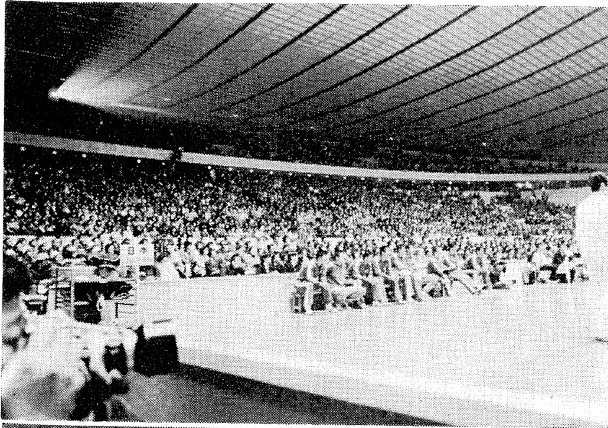
とができた。

ビレンシートを敷きつめ、その上にベニア板を張り、さらにその上に床組をして床面を完成させた。たて三十四・二m、よこ二十

七mの床面積は、学校の体育館に相当する広さを有するものとなった。コートの設置に際しては、高度の技術が要求されたので、選り

競技会の方の気も上々で、前

大会の花、開会式。それは十三年前に行われたあの東京オリンピックの再現を思わせるような華やかなものであった。十一月六日午後一時、福田総理大臣を迎えて、華々しく開幕された。こういう式典には珍らしいことであるが、参加開始された。その初日は、日曜



代々木第一体育館での入場者記録を上廻ったバレーボールワールドカップ大会の会場と、大成功のうちに無事終了した同大会閉会式。

日とあって前売券が九九%の売上げとなったのは驚かされた。それだけに当日は、早朝の六時頃から早くもファン行列ができる程の人気で、当日券の発売時間となる、またたく間に売切れとなってしまった。この日、代々木競技場初まって以来の入場者新記録となった。バレーボールの人気を改めて認識させられたものだった。

さて、大会は大成功のうちその幕を閉じたのだが、ここで一つの小さな「トラブル」を紹介してみたいと思う。

水上のコートについてのわれわれの不安は、先にも述べたが、実際に完成した時点で、選手たちの練習に開放した時のことである。ハンガリーの選手がコートに入り練習を始めたところ、コートが滑り過ぎて練習にならず、引上げてしまった。一体どうしたことだろうか？

この「結露」の件以外には、心配していたような事故、事態も全く起らず、大会も順調に運営されて、われわれ担当者は大変うれしく思っている。

(第二業務部業務課)

主催者及び本競技場関係者が、急遽原因の究明にあたったところ、コート床面に「結露」が生じており、これが滑る原因であるのを突きとめた。床面が零下三度二十度が「結露」を生じさせていた。この解決策として、床面と氷

面の間を充分にあけること、場内の空気の流れを良くすること(このために業務用の大型扇風機を持ち込み、天井に向けて回すことにした)、また、天井照明をつけて床面を暖めること等の工夫をこらし、結露防止に成功したのであった。